

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530742

研究課題名(和文) 精神疾患早期支援のための思春期・青年期過渡的プログラム開発に関する研究

研究課題名(英文) A study about Transitional program development for mental disease early support of the youth

研究代表者

藤島 薫 (KAORU, FUJISHIMA)

東京福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：90530121

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：思春期の若者に対する支援は、家族や仲間、学校、地域などのエコロジカルな視点が必要である。このプログラムは若者の早期支援のために若者と家族のストレンクスに焦点をあてて開発した。12歳から14歳の若者4名(男子2名、女子2名)に対して6日間の集中型の若者プログラムとその母親に対して3回の面接を行った。若者プログラムの内容はグループの力を活用したものが主でコミュニケーションスキル、感情のコントロール、認知トレーニング、創作と運動などである。プログラム実施に先立ってスタッフ研修を行った。その結果、若者と母親ともに自身のストレンクスに気づき自己肯定感が高まることを確認することができた。

研究成果の概要(英文)：Ecological viewpoints, such as a family, a friend, a school, and the community, are required for the support for adolescence. This Program has been developed by focusing on the strength between the youth and their families for early support. The purpose of this study is to verify its effect and further improve the program.

Specifically, a six-day concentrated youth program was carried out on four youth between the ages of 12 and 14, and their mothers were interviewed three times throughout the duration of the program. The program mainly consisted of activities focused on group dynamics including communication skills, how to control their emotions, story writing and exercise. A counselor and a psychiatric social worker provided advice to the mothers for issues that the mothers had and addressed their concerns on how to deal with their children. As a result, both the youth and their mothers were able to recognize their strengths and felt that their sense of self-esteem had improved.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：精神保健福祉 思春期・青年期 早期支援 過渡的支援 エコロジカルアプローチ

1. 研究開始当初の背景

思春期・青年期は、子どもから大人への移行時期であり、心身ともに非常に不安定な時期である。誰もが通る時期であるが、対処することに非常に困難を感じ、時にはストレスが引き金となり精神疾患の発症となる場合もある。精神疾患の早期発見・早期支援はイギリス、オーストラリア、ニュージーランド等の諸外国で取組みが推進されている。2004年にはWHOとIEPA(国際早期精神病学会)合同による「早期精神病学宣言」が提出され、学校に通う15歳のすべての若者が、精神病に対処しうる知識を身につけるべきであるとしている。精神疾患に代表される統合失調症は思春期から青年期にかけて出現することが多く、重症慢性化する病気と捉えられていた。しかし、発症後数年間に最善の治療と手厚い心理社会的支援によって、良好な予後が可能であることが報告されるようになってきた。

イギリスでは、およそ人口10万人毎に多職種の専門職で構成された早期介入チームが配置されている。オーストラリアではユース・ヘルスによる15歳~24歳の青年層に特化した精神保健システムが導入されている。イギリスをはじめとして世界各地で実践されている精神疾患早期介入サービスの効果については、再入院・自殺率の減少、復学・復職率の上昇等が報告されている。わが国では、精神障害者に対する地域ケア推進は始まったばかりであり、退院促進と地域生活支援に関する研究が推進されているが、早期発見・早期支援に関してはまだ十分とはいえず、具体的な実践的な研究はこれからである。

平成21年度から「青年期における精神疾患早期支援プログラム開発に関する研究」(挑戦的萌芽研究21653054)に取り組んできたが、若者が自分らしい人生を築いていくための具体的な対処法の習得を必要としていることが調査の結果明らかとなった。精神疾患の正しい理解と対応についての啓発活動とともに、若者がアクセスしやすい支援機関、さらに若者の行動と心理に焦点をあてたプログラムの開発が求められる。

若者がアクセスしやすい環境を整えた早期支援プログラムの一つにニュージーランドオークランド市早期支援センター(カリセンター)におけるYTP(Youth Translation Programm:若者過渡的プログラム)がある。ニュージーランドでは地区を21に分割しそれぞれに地区保健機構を置き、その中では子どもと青少年を対象とした早期支援サービスが提供されている。YTPは早期支援サービスでの治療を受けた若者が学校や社会に戻るための支援を行っている。若者の力を活用するために主にグループを使ったプログラムが集中的に行われ、リカバリーゴールが明確に示されている。

若者が不安と葛藤を乗り越えるためのスキル(対処法)を具体的な形でサポートする

ことを若者にとって安心の場所で提供されることが重要である。PLEs(精神病様症状)を体験あるいは体験したかも知れないという若者や医療機関を利用している若者に特化せず、メンタルヘルスの問題(こころと行動の課題)によって学校や社会生活に困難を抱える若者に対して提供されることで、結果的に早期支援が可能となるのではないかと考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、若者のメンタルヘルスの問題を起因とする生活のしづらさを改善し、学校生活や社会生活への適応を図るために、YTPをわが国の実情に合わせた形に開発したプログラム適用の可能性を検討することにある。

目的(1)

若者が抱える心と行動の困難を把握することである。具体的には保健室登校、あるいは頻繁に保健室を利用している中学生・高校生等を対象とするが、データの収集については養護教員・医療機関のPSWの協力を得て行う。

目的(2)

ニュージーランドで行われているYTPのプログラムについて研究と分析を行い、日本の実情に即したものに開発を行う。

目的(3)

開発した過渡的プログラムによる介入調査で適用の可能性を検討する。実施場所は、今後の活用と若者が安心してアクセスしやすい場所を想定して、放課後等デイサービス(18歳まで利用可能で20歳まで延長可能)を基本とする。

3. 研究の方法

(1)若者が抱える心と行動の困難を把握する。

思春期・青年期で抱える生活困難に関する調査

思春期・青年期で起こりやすい心身の状態については、発達心理、思春期精神疾患等の文献や先行研究によって明らかになっている。本研究では、それらに基づき、具体的にどのような場面で、どのような困難を抱えるのかについて調査を行う。調査の方法は、中・校の養護教員、医療機関等のPSW(精神保健福祉士)等に対する半構造化面接によって行う。

(2)YTPの実施調査および分析

ニュージーランドの早期支援センター(カリセンター)の一部門であり地域で若者への早期支援として提供されているYTP(若者過渡的プログラム)について詳細なマニュアル、効果等を調査するために視察を行う。1週間のプログラム内容、期間全体のプログラム内容、長期休暇期間(夏休み)のプログラム内容、及び介入方法、評価方法、効果等について資料を収集する。わが国への適用を想定し、利用している若者のアセスメント、プログラ

ム内容、介入方法、関わるスタッフに必要なスキルなどについて整理し分析を行う。

(3)プログラムの開発と試行的介入調査

YTP のプログラム内容分析を踏まえ、日本の実情に合わせたプログラム案を作成する。教育機関・医療機関から得られた若者が抱える生活困難を改善するための内容に対応するものとし、実施期間・回数・時期・時間帯などについて、教育機関関係者、医療機関関係者からのアドバイスを受けながら設定する。介入調査に関わるスタッフの研修に使用するためのマニュアルおよび研修用資料を作成し介入に備え、試行的介入調査を実施する。研究デザインはプログラム参加の前後比較によるシングル・システム・デザインとする。使用尺度は学校環境適応感尺度(ACCESS)、親子関係診断尺度(FDT)、パブリックヘルスリサーチセンター版ストレスインベントリー(PSI)、脳機能バランサー等である。

本研究は、東京福祉大学倫理・不正防止専門部会の承認を得て(承認番号:25-06)実施した。具体的な倫理的配慮の手順および方法については、次の通りである。プログラムの内容と方法、個人情報保護の管理者と匿名化、研究結果の使用について、保護者と若者に対して書面による説明書を示しながら口頭によって説明を行い研究への理解と同意を得たうえで同意書に署名をもらった(若者は保護者同席のもと)。また、安全なプログラムではあるが体を動かす活動や屋外での活動もあることから、プログラム実施中の不測の事態に備えて傷害保険に加入した。

4. 研究成果

方法(1) 若者が抱える心と行動の困難

研究機関が移動になったことから、新たな面接調査は行わずに、前年度調査で得られた高等学校(北海道)におけるメンタル調査結果と先行研究から若者が抱える心と行動の困難について把握を行った。

方法(2) YTP および MST/MTFC の実施調査および分析

精神疾患の治療を経た若者への過渡的プログラムの実態を調査するために YTP を訪問した。また、若者の早期支援を考えるには家族を含めたエコロジカルな視点による支援が必要なことから、MST(Multi Systemic Therapy: マルチシステムティックセラピー)および MTFC(Multidimensional Treatment Foster Care: マルチディメンショナルトリートメントフォスターケア)を併せて訪問をした。訪問期間は2012年2月12日から17日である。

< YTP >

カリセンターが対象としている若者は13~19歳で、最初の精神病エピソードの可能性、双極性障害又は強迫性障害で集中的な専門

的治療を必要とする者である。若者を専門とする精神科医、ソーシャルワーカー、臨床心理士、看護師、作業療法士、文化アドバイザーがチームとして連携しており、目標はリカバリーである。カリセンターでの治療を経て必要に応じ、さらに本人の意思に基づいて復学あるいは復職を目指す YTP でのプログラムが提供されている。YTP の建物は住居だったものを改造しており、安心の場を提供するために事業所名は出していない。

YTP のコンセプトは「若者は必ず変化することを信じ、一人の人間として尊重する。」ということである。プログラムを利用するにあたって様々な専門職がそれぞれ保護者と若者に面接を行い、将来への希望を持ちやる気のある若者が選ばれる。利用料はカリセンターが保健省から得ている資金を利用しているので無料である。

プログラムは15週間、月曜日から金曜日の毎日、朝9時から午後3時まで行われ、定員は8名である。セッションは大きく3つに分かれていて1セッションに2人のスタッフと緊急対応に1人のスタッフが待機している。まず「教育・職業セッション」は教員登録者による授業または職業に就くためのスキルを学ぶものである。「アクティビティグループ」はアクティビティや創作活動の体験を通して様々な学びを得る。そして「スキルグループ」はコミュニケーションや感情のコントロールなどを扱い、社会生活に必要なスキルが身につくことを目的としている。一方的に難しい理論や訓練をするのではなく、若者自身が答えを見つけることができるような働きかけが行われていた。また、楽しいことばかりではなく、時には我慢することや、苦手なことに挑戦することも必要であることを理解するために、スタッフがモデルとなって示し共に考えるという姿勢が貫かれていた。

< MST/MTFC >

心と行動に問題を持つ若者をその家族への専門的支援を目的とした NPO 法人ユースホライズンズ(Youth Horizons)が提供している MST および MTFC について訪問調査を行った。

MST はサウスカロライナ大学のヘレンゲラーらが中心となって開発されたプログラムであり、深刻な情緒障害や反社会的行動をとる若者とその家族を対象としている。背景理論は、家族、仲間、学校、近隣等のエコロジカルモデルおよびシステム理論に基づき、個別的な介入が地域をベースとして提供するものである。MST で重要なことは、家族が目標を設定し、その達成のために治療者と家族が協働で計画をつくり実行することである。

ニュージーランドの文化に合わせて改良された MST がユースホライズンズによって提供されている。対象は10~16歳で家をベースとしている。3~6か月間(20週間で60時間)が基本で一年365日24時間対応であり、

ケースロードは4-6名である。問題行動のパターンを協働で把握して、家族と若者が自分自身で解決(コントロール)できることを目指し、支援者は若者と家族の後ろにつき、温かい雰囲気の中で若者を褒め、家族ができるように助けていくことを大切にしている。

MTFCは、1960年代に学習理論を背景として開発され、その後、パトリシア・チェンバレンらによって発展し、主に触法少年のケアに効果的なプログラムとして各国で使用されている。現在は、MTFC-A(12-17歳)、MTFC-C(7-11歳)、MTFC-P(3-6歳)のプログラムが整備されている。MTFCは、コミュニティをベースとして、専門的なフォスターケア(里親)によるもので、レジデンシャルケアや一般的なフォスターケアに代わるものである。

ユースホライズンズにおけるMTFCは、12-17歳の心と行動に問題を抱えた若者を対象としており、一人の若者は専門的里親(フォスターケアギバー)の家で基本的に6か月から1年の間トリートメントされる。最初の3週間はレベル1で、慣れるために若者は家族とのコンタクトができない。この期間に問題の特定とゴールの設定・計画が作られる。レベル2は次の3か月間で、ゴールに向けての実践である。レベル3は家族に戻る準備期間であって、ケースによって1-8週間と異なる。MTFCのチームはプログラムスーパーバイザーを中心に、自分の家を提供してトリートメントをするフォスターケアギバー、問題行動を解決するためのプランニングとモニタリングをする個別セラピスト、個別セラピストから学んだことが実践できているかをフレンドリーに確認するスキルトレーナー、家族が抱える問題や子どもとの接し方などを教える家族セラピスト、学校における行動と教育に関するアセスメントを行う教育心理士によって構成されている。フォスターケアギバーのミーティングにも参加させて頂いたが、自分たちの役割に誇りを持っており「若者が変化し、家族のもとに戻れる姿をみるのが幸せ」と語っていた。たとえ、家族や若者に課題があっても、単に分離するのではなく、それぞれのストレンクスを見つけ変化を信じていくという支援の姿勢が確立されていた。

方法(3) プログラムの開発と試行的介入調査
<若者と家族のリカバリープログラム開発>

ニュージーランドにおける訪問調査の結果をふまえ、若者への集中型プログラムと家族支援を複合的に行う「若者と家族のリカバリープログラム」を開発した。日本の学校に合わせて長期休業期間にできるよう短期間の集中型とした。若者プログラムは9時から15時までの間にランチシェアを含めると5つのセッションから構成され、リラクゼーション、感情マネジメント、社会生活スキル、認知トレーニング、創作活動、身体活動などを若者が関心を持つようにウォーミングア

ップ、ゲーム、グループワークを取り入れた。家族プログラムは面接によって子どもへの対応の仕方、家族が抱える課題などを協働で解決していくことを目的とした。支障がない限り家庭の様子を理解するために訪問型を基本とした。

<プログラムの試行的介入調査>

プログラム介入に先立って、半年間の間にスタッフ研修を約40時間実施した。また、若者は集中型プログラム開始2週間前に集まってもらいオリエンテーションを行った。プログラム参加者はメンタル及び行動に課題を持ち、学校・社会への適合に困難を抱えている中学生4名とその家族で福祉機関からの照会である。若者プログラムは平成26年3月21日-28日の間で全6日間の集中型、家族プログラムは若者プログラムの前後の期間で全3回の面接を行った。プログラム開始前に学校生活に関すること、親子関係に関すること、ストレスに関することについてのアンケートを若者と保護者に行った。若者のPSIおよびASSESSの結果は以下の通りである。(介入の前後比較は、フォローアップの後に実施)

若者A:男12歳、ストレス反応として身体的および無気力が高く、ストレスは先生との関係がやや強い。また学習の適応度が低く学習方法などの支援が必要とされている。若者B:男14歳、ストレス反応は身体的および無気力として出ている。ストレスは先生との関係、友人関係、学業となっているが、父親、母親、担任、友人がソーシャルサポートとして認識されている。反面、否定的な友人関係も見られる。

若者C:女13歳、ストレス反応として身体的反応、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力いずれも高い。ストレスとなっているものは先生との関係でソーシャルサポートとして担任を強く否定している。

若者D:女13歳、ストレス反応では身体的反応、抑うつ・不安、無気力が高くなっており、ストレスは先生との関係で否定的な捉え方になっている。

若者プログラムはセッション毎に2人のスタッフによって運営されている様子を研究者の観察で変化を記録した。また、毎回、終了時に若者にセッション毎の振り返りをシートに記入してもらった。家族プログラムは心理カウンセラーおよび精神保健福祉士による面接を行い、毎回、面接記録を残した。また、プログラム終了後に保護者へのアンケートを行い、若者はプログラム終了3ヶ月をめぐり行うフォローアップで前後比較を行う予定である。

参加したメンバーは身体的不調や学校での不適応、コミュニケーションスキルの不足など様々な課題を持っており、時として不適切な感情表出や関係性によって危機的なこともあったが、本来一人一人の若者に備わっていたストレンクスとグループの力によ

て、成長していく姿を確認することができた。プログラムの最中では仲間同士で助け合い、いたわりあう場面も多く、豊かな交流を見ることができた。最終回のセッションは若者が自分たちで企画をして実行するという内容であったが、見事にやり切り内容も非常に素晴らしいものであった。また、終了式では、若者が自ら仲間へのメッセージとスタッフへの感謝の気持ちを発表することができた。

家族プログラムにおける面接では、課題を持つ子どもとうまく関わることのできない葛藤、学校と教員に対する不満、子どもの将来について、そして保護者である母親自身が抱える心理的課題などに対する相談援助を行った。一般に問題だと思われる子どもを養育する親は、自信を失うことや否定されることが多い。支援の基本を家族がもつストレングスを信じ活用することで、問題ばかりを見るのではなく、子どもと家族の未来に焦点を置くことができた。終了後のアンケートでは「子どもを肯定的に捉えることができるようになった」、「自分自身の悩みを聞いてもらえてうれしかった」、「考え方に幅がひろがった」、「具体的な対応方法を知ることができた」などの回答を得ることができた。

試行的介入調査の結果からスタッフのプログラム運営スキルと共有する支援の姿勢を担保することが非常に重要であることを再認識した。プログラム改善と現場での活用をめざし、スタッフ研修の内容とマニュアル、若者のニーズにあった各セッションの内容と進め方、期間設定のあり方、家族面接の回数など、他機関との連携など、更に検討し研究を進めて参りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

1. 藤島薫：若者と家族のストレングスに焦点をあてたりカバリー志向の早期支援・過渡的支援～ニュージーランドにおける早期支援プログラムの実際から、東京福祉大学大学院紀要、査読有、第4巻第1号、2013、pp.73-82

2. 藤島薫：ニュージーランドの若者を対象とした早期支援プログラム、メンタルヘルスマガジンこころの+、査読無、2012年10月号、pp.30-33

[学会発表](計 3件)

1. 藤島薫：若者と家族のストレングスに焦点をあてた早期支援過渡的支援～ニュージーランドにおける早期支援プログラムから～、第12回日本精神保健福祉士学会、平成25年6月、金沢エクセルホテル東急(石川県)

2. 藤島薫：若者のストレングスを焦点としたリカバリーゴールの過渡的支援～児童デイサービスを基盤とした思春期・早期青年期への試行的実践に向けて～、日本社会福祉学会第61回秋季大会、平成25年9月、北星学園大学(札幌市)

3. 藤島薫：若者と家族のストレングスに焦点をあてた複合的支援の重要性～地域をフィールドとした安心のプログラム試行に向けて～、第17回日本精神保健・予防学会学術集会、平成25年11月、学術総合センター(東京都)

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1)研究代表者 藤島薫(FUJISHIMA KAORU)
東京福祉大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：90530121

(2)研究分担者 なし
()
研究者番号：

(3)連携研究者 なし
()
研究者番号：